

遠藤文学における「同伴者イエス」：「母なる神」からの飛躍と後退

池田，静香
福岡共同公文書館

<https://doi.org/10.15017/1495361>

出版情報：九大日文．23，pp.79-94，2014-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

遠藤文学における

「同伴者イエス」

——「母なる神」からの飛躍と後退——

池田 静香
イケダ シズカ

はじめに

日本人の感覚に合うキリスト教の有り様を追い求めた遠藤文学は、17世紀切支丹弾圧下の長崎を主たる舞台とし、転びバテレンの救いを描いた『沈黙』（新潮社 昭41年3月）と、江戸時代初期、伊達政宗の命によりノベスバニヤとの通商を開くべく渡欧した支倉常長をモデルとし、政治の世界に翻弄された一人の召出衆の悲哀を描いた『侍』（新潮社 昭55年4月）を二つの柱として、その文学的潮流が把握される。作者は、自らの軌跡を振り返り、『沈黙』について「第一期の円環を閉じた」⁽¹⁾と語り、『侍』を「第二期の総決算」⁽²⁾と称したが、遠藤文学におけるこの二つの段階は、『沈黙』を端緒とする「母なる神」の創出と、『侍』を頂点とする「人生の同伴者イエス」像の確立として把握されるのが常である。最後の純文学作品となった『深い河』（講談社 平5年6月）で示した「宗教多元主義」を除けば、「母なる神」と「同伴者イエス」像は、紛れもなく遠藤文学が提示したキリスト教像の二大イメージである。

それらのイメージが刻まれた作品の発表時期を時系列に並べれば、あたかも「母なる神」のイメージを捉まえたからこそ出てきたのが「同伴者イエス」像であるかのように受け止められる上、両者を遠藤が「第一期」、「第二期」と呼んだ時、まるで二廻りほどの螺旋状の階段を登るその途上で、一つ一つのイメージの中心となる杭を、作者がその文学的軌跡の上に打ち込んでいったという感覚に囚われる。もちろん遠藤文学の集大成とも言われる『深い河』発表前の遠藤が述べた、作者自身の総括ともいうべきこのまとめ方は、作家の来歴を語る自伝的な把握の仕方としては妥当であろう。だが、この二つのイメージの端緒となる発言が、『沈黙』執筆前の著作で既に双方とも書き付けられているとすれば、そう単純に認識するのみで理解することが許される問題ではなくなるだろう。むしろ、「母なる神」のイメージを先に打ち出し、「同伴者イエス」のイメージが後者となったのは、例えば『沈黙』執筆前、生死の境を彷徨うほどの大手術をせねばならぬ大病を患ったといった、作者の人生における偶然の巡り合わせが多分に影響するだろうから、晩年の作者述懐に倣い、第一期、第二期と名付けるしかないだろうが、遠藤が作家となった当初から、汎神論的風土に馴染むキリスト教の相貌を追い求めており、しかも、彼の文学において、最終的に提示された日本のキリスト教像の二大イメージの芽生えと推察される言及が、作家の出発期であった昭和33年という早い段階のエッセイ「聖書のなかの女性たち」（婦人画報 昭33年4月号、昭34年5月号）にあるとすれば、この二つのイメージの

関係性を明らかにする必要があるだろう。但し、この相関関係は、エッセイ「聖書のなかの女性たち」を母胎として、その後の両イメージへの派生の仕方把握するのではなく、「同伴者イエス」像の到達点となった『侍』からそこに至る道程を照射することによって、明らかとなる痕跡である。

「母なる神」は、『沈黙』（新潮社 昭41年3月）に端を発し、ここで展開された棄教者への接近から掴んだ作者の思いを確信にすべく、その後、作者が開始した本格的な切れ切支丹研究の成果である短編「母なるもの」（新潮 昭44年1月号）でひとまずの纏まりを見せるが、作家がキリスト教の日本の変容を探る中心的対象であったかくれ切支丹研究は、「母なるもの」発表の13年後まで継続され、昭和54年になってようやく、論考「日本の沼の中で」（野生時代 昭54年1月〜6月号）において決着がつけられ、汎神論的風土においてキリスト教の母性的側面を強調するにあたっての、バランス感覚を遠藤は手に入れた。

一方、「同伴者イエス」のイメージについては、直接的には『死海のほとり』（新潮社 昭48年6月）で初めて打ち出され、その後『侍』（新潮社 昭55年4月）で明確にされたといわれるが、『死海のほとり』執筆にあたってのイスラエル取材は、『沈黙』発表の翌年である昭和42年に開始されている³⁾。とすれば、「母なる神」への探求と「同伴者イエス」像の掌握が、明らかに重なり合った時期があったことを思う。そこで小稿では、遠藤の「同伴者イエス」造型の変遷を辿り、その変化の有り様を確認するとともに、それ以前から行われ、また同時並行的に進めら

れた「母なる神」に対する作家の決着のつけ方を視野に入れることで、「母なる神」と「同伴者イエス」という遠藤文学における二大イメージの相関関係を明らかにすることを目指す。

純潔論議と罪意識問題の相似形——「聖書のなかの女性たち」

遠藤作品において、聖書研究の成果と称されるのは、『死海のほとり』（新潮社 昭48年6月）執筆前、もしくはそれと並行して開始された『イエスの生涯』（新潮社 昭48年10月、初出は『聖書物語』（波 昭43年5月号、昭48年6月号）と、その続編となる『キリストの誕生』（新潮社 昭53年9月、初出は「イエスがキリストになるまで」（新潮 昭52年5月号、昭53年5月号））だが、これらの源泉となる著作に「聖書のなかの女性たち」（婦人画報 昭33年4月号、昭34年5月号）がある。昭和33年、皇太子であった明仁親王（後の平成天皇）のご婚約に象徴される恋愛結婚に対する憧れもあった昭和30年代、遠藤は度々「日本における純潔とは何か？」について言及を繰り返す⁴⁾が、この問題をキリスト教の側面から直接的に解説することを試みたのが、「聖書のなかの女性たち」である。連載の冒頭にあたって遠藤は、「婦人雑誌にしばしば、掲載される純潔論」について、「なぜ若い女性は純潔をまもらねばならないか」という問題にたいして本当に納得のいく答をばくはまだ読んだことはない」と述べ、「日本ではたんに女性の自己防衛以上の意味がまだハッキリとできあがっていない」純潔の問題を、西洋人が持つ聖母マリアに象徴される「キリスト教という宗教理念に結びつい」た高い純潔の意義を鏡とする

ことで、読者に再考を促すことを試みた。⁶⁵⁾

遠藤にとつて昭和33年は4月に、前年に発表した「海と毒薬」(『文学界』昭32年6、8、10月号)に筆を入れ、文藝春秋新社から単行本化した年である。日本人の罪意識のなさを暴いたと評される⁶⁶⁾『海と毒薬』(文藝春秋新社、昭33年4月)が、第5回新潮社文学賞、第12回毎日出版文化賞を受賞したのも、この年となる。

第二次世界大戦下とはいえ、米国人捕虜の生体解剖実験に参加していく二人の医学生の心の葛藤を描いた『海と毒薬』は、最後の倫理観のない日本人の不気味さを描くが、執筆中、汎神論的感覚のなかに漂う彼等の無意識が「神を志向するものに変わればと略々希望して」いた⁶⁷⁾という遠藤にとつて、『海と毒薬』を書いたことは、「罪の意識がない、本道の徳律がないと何時までも「ない」づくしでも困るので(略)、ここからどのようにつきかというステップの問題が起きてくる」⁶⁸⁾と、日本人の道徳意識に関する新たな課題を作者に突きつけた。それは、「聖書のなかの女性たち」における純潔論議の前提となった、当時の婦人雑誌における次のような言説に対する作者の批判にも通じるものである。聖書を手本に、新たな純潔の意義を示そうとした理由を、遠藤は次のように述べている。

極端にいえば、日本の女性の場合彼女が純潔をまもるのは二つの理由しかないといつていいぐらいです。一つは若い女性としての本能的な恐怖感、生理的な肉慾嫌悪感、次に純潔が男性にたいする女性の最後のな武器になるからです。この二つの理由以上の理由は日本の女性の場合、率直

に言えば、ツケ足しにすぎません。ですから時として「純潔を結婚のトリヒキにするぐらいなら、愛している人には結婚前に肉体を与える方が誠実だ」という意見も若い女性から出るのです。このように純潔の意味は、ぼくたちの国ではまだ本能的な次元や男性に対する利害関係でしか考えられていない。⁶⁹⁾

純潔に対し、限界値を設定することなく行動しうる日本人のこうした感覚を疑問視すればこそ、遠藤は、聖母マリアを鏡とした新たな純潔の意味を提示しようと努めた。また言うまでもなく、この純潔に対する所感は、遠藤にとつて汎神的風土のなかで育まれた日本人の道徳意識・倫理観に対する懸念と同質の問題であった。『海と毒薬』上梓後、遠藤は「本道の徳律がない」日本人の心の不気味さを認識することを第一のステップとし、その先に、日本人の罪意識の所在を把握することを決意したが、このことについての遠藤の明確な意識を示す言及としてしばしば採り上げられるエッセイ「日本人の道徳意識」(『図書新聞』昭33年1月18日)には、次のように記されている。

極端にいえば、日本人の心には形而上的な意味での善も悪も存在しなかったのである。したがってこの善と悪の闘いも結局、もつと低い次元、家庭と個人の闘いや世間と自分との闘いでは形をとつたかもしれないが、もつと究極の良心と人格の闘いにはならなかったのだ。⁷⁰⁾

遠藤は、純潔に対する日本の感覚と同様、当事者の立場や時代の流れによつて左右される日本の善悪の基準を憂えた。そうし

たなか、自分が身にまとったキリスト教という西洋において普遍とされる価値が、異文化である日本で、どのように応用できるのかを探究しようとしたのである。この探究にあたっての指標とされたのが、日本における罪意識及び純潔の問題だった。

遠藤が数多く書いた恋愛論は西洋文学をサンプルとする場合が多い⁽¹¹⁾が、遠藤は、文学における男女の恋愛に関する語り口を、信仰者が神への信頼を告白する話型の相似形として捉えているし⁽¹²⁾、キリスト教を一般の読者に向けて語る書物のなかで、神のいない国に生活する私たちに、なるたけ神を身近に感じさせようと、恋人への思慕（愛慾）を、キリストへの信頼（愛）と結びつけて説明する⁽¹³⁾。こうした点を考慮しても、やはり、昭和33年という早い段階から、罪意識の問題同様、遠藤が男女関係における純潔を問題とすることで、日本人における確かな何かを、聖書から掴み取ろうとしていたことは、注目に値するだろう。

初の聖書解説書にみられるキリスト教理解

——「聖書のなかの女性たち」から『沈黙』へ
「聖書のなかの女性たち」は、聖書に語られた、イエスが（あくまで遠藤的な意味での）非常に人間的な女性たちに出会った時、彼女等とどのように接したのかという点と、その延長線上に組み立てられるイエスの母マリアがいかにして母性の象徴である聖母マリアとなったかという点とを紐解いていくが、その最終章で、既に「人生の同伴者」ともいべきイエスの姿を捉え、

こう記している。

キリスト⁽¹⁴⁾はあえて——あえてというよりは進んで、人々からうしろ指をさされるような女性に近づいていった。／これはキリストがそういう虐げられた人々にふかい憐れみを感じたためでしょうが、それ以上に彼が我々に一つの教えを——つまり我々人間は誰一人として他人を裁いたり軽蔑したりする権利がないことを、はっきりと示したためだと、ぼくは考えています。／そうです。キリストの教えた本当の精神の一つは、いかなる人間も高処から他人を裁く資格はないということです。（略）大事なことは自分も他人も同じように弱い人間であることを知り、そして他人の苦悩や哀しみにいつも共感すること、これをキリストは聖書の中で「女性を通して」教えているのです。／だから彼らは人々から後ろ指をさされる淫売婦に進んで近づいていった。彼女がポト、ポトと落す泪のなかに、その女がこの生のなかで受けねばならなかった哀しみ、人々の辱しめ、それを休えた毎日のことを一緒に悲しんでやった。キリストは彼女を慰めたのではない。キリストは彼女と一緒に苦しんでやったのです。／（略）したがって布教するキリストの一行につき従った女性の大部分はみな、過去において人間的な苦悩や哀しみを味わいつくした女性たちだったといえます。（注、傍線は池田、以下同）⁽¹⁵⁾

ここで、聖書に登場する「虐げられた人々」と共に苦しむイエスの姿を、遠藤が「慰めたのではない。（略）一緒に苦しんでや

った」と、限定的に示していることには注意せねばならない⁽¹⁶⁾。なぜなら、これが、「母なる神」と「同伴者イエス」の分れ目だからである⁽¹⁷⁾。悪女・成瀬夫人が聖化する道を模索しながらも叶わなかった『スキヤンダル』(新潮社 昭61年3月)執筆後の対談集『人生の同伴者』(春秋社 平3年11月)は、遠藤文学研究の泰斗である佐藤泰正を聞き手に、遠藤が自作を総括していくものだが、そのなかで、『沈黙』と『侍』におけるイエス像の違いをこう述べている。

『沈黙』のときは同行者イエスといいますが、こちらの苦しみを知っているイエスというのを書きましたけれども、ペドロ岐部のときはイエスに少なくとも相似形になろうとするキリスト者ですね。イエスもまたこの同じ苦しみを受けたんだからという、相似形になろうとするキリスト者を書くことで、右翼左翼を固めようという気持はありました。その相似形になろうという気持が、やがて『侍』のなかで侍がキリストというのにはぜんぜん信じなかつたけど、「あの人」と相似形になつていくわけです。⁽¹⁸⁾

遠藤は、『沈黙』で示したのは共に苦しむ同行者イエスであり、その後、『銃と十字架』(中央公論社 昭54年4月、初出は「中央公論」昭53年1月・12月号)を経て『侍』で示したのは、イエス(あの人)と同様の苦しみを甘受しイエスの相似形になろうとするキリスト者だと述べる。そこにある違いとは何かと言えば、共に苦しむイエスに近づこうとする信仰者が有する、神を志向する能動的な働きかけの有無⁽¹⁹⁾であろう。共に苦しむイエスというイメ

ージにおいては変わらず、イエスに触れた人々が、彼の生き方に添おうとするか否かの違いである。

キリスト教の母性的側面を強調した『沈黙』は、「かくれ切支丹(注、遠藤表記)」の MARIA 観音信仰にヒントを得て、棄教者をも包み込む「愛」を描いたが、その「愛」とは、踏絵を踏んだ者たちの足の痛みを知るイエスの姿として描写⁽²⁰⁾され、ロドリゴが踏絵を踏むことは、拷問によつて死んでいく日本人信徒を助けるための「今まで誰もしなかつた一番辛い愛の行為」⁽²¹⁾だと意味づけられた。『沈黙』で提示されたこの意味づけを、先に引用した「聖書のなかの女性たち」のイエス像に則して言い換えれば、棄教者の苦しみを知るイエスは、彼等の心と足の痛みを共に味わい、政治の世界における方針転換によつて生じた禁教と弾圧という茨の道を、殉教者とだけでなく、心ならずも踏み絵を踏まざるを得なかつた人々とも、共に悲しみながら歩む、ということになろう。そして、『沈黙』の絵踏みの場面における「今まで誰もしなかつた一番辛い愛の行為」という解釈を、あえてイエスならざる者がイエスの愛の行為に倣つた例として言い換えるならば、それは「聖書のなかの女性たち」で示された MARIA 理解に、その原型を見出すことができる。それは、イエスの母 MARIA が、処女のままイエスを身籠もつたことや、我が子が眼前で処刑されるのを目の当たりにせねばならないという「苦渋の(略)幸福な人々とはちがつた運命を静かに受け入れた」ことの延長線上にある行為だろう⁽²²⁾。ロドリゴは禁教という時代の運命を受け入れ、その後は、せめて日本人の

ためになる人生を願いながら、切支丹屋敷のなかで憐れな余生を過ごす、遠藤は『沈黙』のロドリゴについて、棄教しながらも「キリスト教徒」であり続けたと語る⁽²³⁾。遠藤にとつて、キリスト教徒であることの本懐が、イエスの示した「愛」の行為に則した人生を送ることであるとすれば、「今まで誰もしなかった一番辛い愛の行為」である絵踏みを行ったのであれば、その後のロドリゴがキリスト教徒であったのは、自然な流れであり、その信念は、「聖書のなかの女性たち」で示したイエスの「愛」の人生への理解に裏打ちされていただろう。

だがこの時、果たしてイエスは、棄教者を慰めたのだろうか。作品の直接的な表現から、棄教者への慰めの有無を確定するのは困難だが、『沈黙』執筆後の遠藤の自作解説による影響を考慮すれば、この部分の読みは、イエスが「慰めた」方向へと矛先を定めていく。周知の通り、遠藤は『沈黙』で絵踏みを肯定した物語を発表したことの根拠を、新約聖書が成立した背景となるキリスト教の母性的側面に見出す⁽²⁴⁾。そしてそのことが、更に遠藤がキリスト教の日本の変容の具体例と目したかくれ切支丹の納戸神信仰と相俟って「母の宗教」のフリーズで繰り返して語られ、「ちようど母親ができのわるい子供に対してそうであるように、神がそれ（注、子供）をゆるし、神が人間と一緒に苦しむような宗教」⁽²⁵⁾として、遠藤文学の主張する思想の中心となる。更には、遠藤文学において、特に弱者キチジローのような人物を対象としたキリスト教信仰の必要性が語られる場合、それは、「どんな過ちも結局は許してくれ、悲しみを慰め

てくれ、共に苦しんでくれた（略）母の思い出」⁽²⁶⁾に通じるかくれ切支丹の納戸神・マリア観音信仰を中心としたものとなっていく。だが、それは、「聖書のなかの女性たち」の段階では、イエスは「彼等の苦しみを慰めたのではない」と、遠藤が踏みとどまった一線であった。『沈黙』で示した「同行者イエス」と『死海のほとり』における「同伴者イエス」像との相違を考える時、この点は、特に重要なイエスの機能であったと推測する。

『沈黙』を超えたという意味での同伴者イエス

——同伴者としての「母」とは何か

前節で確認した通り、後年、対談集『人生の同伴者』において遠藤は、『沈黙』のときは同行者イエスを描いたというが、これと似たフリーズで『死海のほとり』や『侍』で描いたイエスを説明し、執筆のテーマとしたのが「同伴者イエス」である。『死海のほとり』初版本同封の付録に、次の説明がある。

「私」（注、主人公の戸田）は同伴者イエスを、最終的に多少は感じて飛行機に乗るわけです。／同伴者イエスというのは、わたくしは『沈黙』以来、最終的な決め手になるものだったという感じがしたんです。つまりあなた（注、対談相手の江藤）がさつき母親とおっしゃったけど、母親っていうのは同伴者ですからね。（略）わたくしにとつては特に同伴者だったんです。同伴者イエスの発見ということは、結局イエスが復活したっていうことです。（略）／無力なイエ

スでなかったら、復活するという意味がないという考えになつてきたわけなんです。栄えある、立派なことをしている人は、復活ということをして、それほど意味がない。この世において無力だった人間だから意味があるし、復活というキリスト教的な意味がある。『沈黙』を超えようとしたのはそこだったんです。／（略）手ばかり握つて奇蹟は

行なえないというのは「同伴者」の条件ですよ。イエスはいつもいつも、神はわれを見棄てたもう、と嘆いておられたと思いますよ。しかし、世の終りまでいつもこの人たちと一緒にいたいという気持はあつた。それが彼の十字架の死で、可能になつた、つまり人間の永遠の同伴者になつたわけで、そこを（略）声を大きくして言いたい。⁽⁶⁷⁾

ここで遠藤は、同伴者イエスを『沈黙』以来の最終的な決め手と考へていたと述べ、その具体的な存在を「母親」のようなものだとする。『沈黙』からの流れで考えれば、ここで言う「母親」とは、かくれ切支丹の納戸神信仰に代表される、「どんな過ちも結局は許してくれ、悲しみを慰めてくれ」た母を思い浮かべるが、同時に、遠藤が「とくにわたたくしにとつては」と自分個人にとつての母親の役割を強調しながら、「同伴者だつた」と説明していることに留意したい。なぜなら、遠藤にとつて「母親」とは、決して「やさしく許してくれる」だけの存在ではなかつたからである。加えて、先に引用した通り、遠藤は『沈黙』で描いたのは「同行者イエス」であつたと説明し、重なり合う部分はあつたにせよ『侍』を頂点とする「同伴者イエス」とは

違う何かを含んだイエス像であつたと理解していた。とすれば、より一層、同伴者イエスについての認識を示したこの引用で作者が語るころの「母親」の役割については『沈黙』の系譜における「母」の役割からなにかの变化を促すものとして、作者に意識されていたと考へる。

『沈黙』上梓の翌年、遠藤は『死海のほとり』執筆へ向けたイスラエル旅行を開始している。また、同時に実地調査を伴つたかくれ切支丹研究にも着手し始める。こうして、「同伴者イエス」への取り組みは、苦しみ・悲しみを理解し、優しく許してくれる母親のような「同行者イエス」探究の深化とともに、その第一歩を踏み出した。こうしたなか、昭和42年秋、エッセイ「母と私」（母を語る）潮文社 昭和42年10月所収）において、自身と亡き母との思い出を語るにあつて、「良心の基準としての母」の存在を遠藤が認識していたことは、興味深い。むろん、昭和42年のこのエッセイで、「良心の基準としての母」は、転び者であるかくれ切支丹たちがいつも心に抱えていたであろう後悔の念と同じく、出来の悪い息子だつた遠藤に申し訳ないという後ろめたな気持ちを起こさせる存在として、認識されている。⁽⁶⁸⁾だが、許しを求めて絶る対象としての母と、良心の基準としての母は、同一ではないだろう。なぜなら、「同伴者イエス」像を確立した『侍』（新潮社 昭55年4月）発表の前年、『沈黙』（新潮社 昭41年3月）発表以後、継続してきたかくれ切支丹研究の成果をまとめ、次のように述べているからである。

「後悔と許しの信仰」にすぎりながら彼等ははじめから、

その後悔が再起のための後悔ではなく、どうにもならぬ業に従う自分の運命を歎き悲しむ後悔であることを知っていた。そしてこのどうにもならぬ自分たちの業を仕方なしとして許してもらいたいというのが彼等の信仰だったのである。／＼これは日本的な、あまりに日本的な信仰である。略）そこには基督教で言う十字架の意味、イエスの受難の意味も忘却されていたのだ。⁽²⁹⁾

『沈黙』は、「後悔と許しの信仰」にすぎる精神風土を有した日本人に、受け入れてもらいやすいキリスト教の側面を前景化することに、創作の主眼が置かれていた。そのため、日本への移入の入り口を切り開く『沈黙』で描かれるイエス像は、こちらの苦しみを知っていてくれる母親としての「同行者イエス」であれば、まずはよしとしようと考えられた⁽³⁰⁾。だが、それだけでは、キリスト教の本質である「十字架の意味、イエスの受難の意味」が忘却される危険があることを、かくれ切支丹研究から、遠藤は学ぶ。だからこそ、『侍』構想中、実母と自分の関係をモデルとして描いた短編「還りなん」（『新潮』昭54年1月号）では、良心の基準としての母に認めてもらえたかどうかを自問する主人公が描かれたのである⁽³¹⁾。とすれば、先の引用で、同伴者イエス像を描いた『侍』について、イエス（あの人）の相似形になる侍を描いたと遠藤が述べる時、そこには、良心の基準としての母と同じように、「愛」に生きたイエスのような生き方を促すイエス像がなくてはなるまい。不甲斐ない自分ではあれど「良心の基準」としての母に認められたいと思う遠藤

の心と、現実には無力でありながらも愛に生きることには徹したイエスの生き方に倣いたいと思う人々の心は、ある高みを志向するという意味において同質である。そしてその意味において、遠藤にとつての「母」は、信仰者にとつての同伴者イエスと同じ役割を有するのである。また、このように把握した上で「聖書のなかの女性たち」を振り返るならば、同伴者イエスと交わった人間は、遠藤が「聖書のなかの女性たち」において示した、マリアが聖母マリアとなつた過程を、その人なりにはあるとしても、追体験することになる。⁽³²⁾

同伴者イエス像への飛躍——『死海のほとり』

前節で確認したように、イエスの相似形になろうとするキリスト者を育むのが同伴者イエス像だとしたならば、このことを『死海のほとり』の表現において指摘すれば、言うまでもなく、『沈黙』のキチジローの流れを汲む弱虫修道士コバルスキ（ねずみ）の描き方を確認せねばなるまい。主人公戸田は作者の分身的キャラクターを持つ人物であり、イエスの足跡を訪ねてイースラエルへ赴くが、その途中、学生時代を戦時下の日本で共に過ごしたポーランド人の弱虫修道士ねずみが、強制収容所なかでどのように死んでいったのが気にかかるようになり、気づけば、ねずみの最期を知る人を求め訪ね歩く旅へと、その目的が変わっていく。そして、最終的に、戸田が知り得た元囚人によるねずみの最期は、次のようなものだった。

雑役の仕事に向う私を背広の独逸人が呼びとめて、コバル

スキを連れてくるように命じました。私が彼の腕をとると、その膝がしらが痙攣したように震え、今にもししゃがみこみそうなのがわかりました。足もとに水が流れはじめました。恐怖のあまり彼の他の飢餓室に行く囚人のように尿を漏らしていたのです。／行こうと言うと、彼は泣いて首をふりました。そして——私に——この私に彼の最後の日の食糧になる筈だったコツペ・パンをくれたんです。／背広を着た独逸人が彼の左側に立つて歩きだしました。うしろで私はじつとそれを見送っていました。コバルスキはよろめきながら温和しくついていきました。その時、私は一瞬——一瞬ですが、彼の右側にもう一人の誰かが、彼と同じようによろめき、足を曳きずつているのをこの眼で見たのです。その人はコバルスキと同じようにみじめな囚人の服装をして、コバルスキと同じように尿を地面にたれながら歩いていました。⁽³³⁾

ここで、飢餓室へ連れて行かれるコバルスキ（ねずみ）の右側を、「足を曳きずつて（略）みじめな囚人の服装をして（略）尿を地面にたれながら歩いて——いたと証言される幻影が、『死海のほとり』のもうひとつの物語『群像の一人』の章で追求された十字架に架けられるイエスである。引用部分の直後は、イエスの左側に磔にされ、「俺のことも天国で……忘れないでくれ」と嘆く囚人に対し、イエスが「いつも、お前のそばに、わたしがいる……」と、十字架の上にならながら苦しい微笑みを浮かべて答えた様子が挿入される。そのため、ねずみは、イエスの

最期の時左側にいた囚人と同じように、収容所での最期をイエスの左側で迎え、イエスから「お前のそばに、わたしが……いる」との言葉をかけられながら最期の時を迎えたという物語の連鎖を受ける。さて、『死海のほとり』において、現代の物語と歴史物語が交差するここまでの意味の連鎖であれば、『沈黙』でロドリゴが「お前の足の痛みを知っている」と語りかけられた「同行者イエス」の範疇に入ると考えるが、この描写の直後、更に、ねずみの死に対する意味づけは変化し、戸田によつて、死後、ナチの手によつて「石鹼」にされたねずみは、イエスと同じ「人々の悲しみを洗う」という愛の使命を背負ったのだと解釈されている。この点が、『沈黙』を超えた領域である。

もしイエスがそばにいたら、私（注 戸田）はこう言いたかった。（あなたも石鹼になった。それは知っています。だからあなたは、私のねずみも石鹼にされたのか）／あなたは無力で、無力だったからナザレで追われ、ガラリヤの村々からも追われ、無力だったから、エルサレムで人々に罵られながら捕えられ、無力なくせに自分の体から絞り出した苦痛の脂で、たくさんの人間の悲しみを洗おうと考えられた。そして、死のまぎわ、いつもお前のそばにわたしがいると呟かれた。だからあなたは、ねずみにも、誰かのよごれた爪の垢を落し、幼い児の股を綺麗にし、情事のあと、女の体を洗うように仕向けられたのか。そしてあなたは、尿をたれて引きずられていくねずみのそばで、御自分も尿をたれながら従っていかれ、最後には自分の運命に似たも

のを私のねずみにもお与えになったのか。それを認めるのは辛い、それは、私があなたの復活の意味をほんの少しだけでも考えたからなのでしようか。⁽³⁴⁾

こうして、ねずみとイエスが同質の使命を背負い、ねずみの死がイエスの死に重なることが、遠藤にとつてイエスの復活（『死海のほとり・付録』）であり、遠藤が描こうと努めたイエスの相似形になろうとするキリスト者の姿（『人生の同伴者』）である。つまり、「同伴者イエス」と共に、処刑されたねずみは、「イエス」になったのである。飢餓室へ向かう直前のねずみが、自分の最後の食事になるはずだったコッペ・パンを仲間に分け与えたのは、V・Eフランクルの体験記『夜と霧』（訳、霜山徳爾　みすず書房　昭31年8月）からの引用であるばかりでなく、遠藤は最後の晩餐のパンのイメージを引き継ぐものとして意識していた⁽³⁵⁾。死後、ねずみがイエスと同じ使命を担ったのだとすれば、あの場面においてねずみが最後に分け与えるのがパンだったのは、単にフランクルの証言が示す現実から引いたのではなく、その意味するところにおいて、イエスの肉の象徴である「パン」でなければならなかったであろう。

また、ねずみが、イエスと同じ「人々の悲しみを洗う」という運命を引き継ぐこと。それこそがイエスの復活であるという考えは、「聖書のなかの女性たち」において、聖母マリアの誕生として語られたロジックと、部分的に同じであることに注意したい。遠藤は、イエスが十字架の上からマリアに「女よ、これ、汝の子なり」と呼びかけたのは、「母マリアにも自分と同

じような生き方を訴えたにちがいない」と解釈し、マリアに、「母親がわが子の苦しみを自分の背に引き受けるように、（略）すべての人間の母になることを要求」し、マリアがそれを引き受けたことによつて彼女は人類の母である聖母マリアとなったのだと述べる⁽³⁶⁾。つまり、イエスはマリアに、自分の相似形となることを願ったのだと、遠藤は理解している。このことは、苦しみを分かち合つてくれる「同行者イエス」（『沈黙』）の役割をマリアが担うだけでなく、その両輪をなすイエスの相似形となるキリスト者を育む「同伴者イエス」（『死海のほとり』『侍』）としての機能をもマリアが背負うことで、聖母マリアとなるのだということを示す。だが、マリアが聖母マリアとなるのはイエスの願いがあつたからだけではなく、イエスの最期の時の願いを受け止めるだけの人間的器を磨く経験があつたからだろう。

先に確認したように、母マリアは、聖書に登場する、イエスが寄り添った虐げられた女性達が抱えた苦悩同様、いやもしくはこれを超えた苦悩を抱えた。たとえ受胎告知があつたとしても、イエスの母となつたのも、姦通に対する社会的な罪が甚だしい時代の身に覚えのない妊娠であつたし、母マリアは、我が子が囚人として殺される様をその眼前で見つめなければならぬという最大の人間の苦悩をも、背負つた。そして、こうした苦悩を、マリアには受け入れたという経験があつた。

『死海のほとり』において、ねずみがイエスと同じ使命を与えられたとするその物語の運び方について、高堂要は、ひとまず評価しつつも「少し力技でおさえこんだような感じがした」

と断っているが、「力技」と思わせたのは、弱虫ねずみのキャラクターがイエスと同じ使命を有するまでの過程があまりに唐突すぎることに起因するのではないかと推測する。例えば、マリアは、当時死刑を宣告されてもおかしくない処女懐胎（夫以外の男性との間の妊娠）という現実を受け入れ、そうした苦悩の上に産んだ我が子イエスを、自らの眼前において囚人として殺されるが、その運命もまた受け入れた。むろん、遠藤とて、こうした試練に際し、マリアが動揺しなかったとは理解していないが、少なくとも周囲にその動揺を悟られないほどであったとすれば、このことは、そうした経験の上に、マリアがイエスと同じ使命を受け継ぐだけの器を磨いたことを示すだろう。それに対し、ねずみの場合には、強制収容所という凄惨な場における自らの運命に、常に怯えるばかりである。そこに、イエスと同じ人々の悲しみを洗うだけの人間的な器量があるのだろうか。イエスの幻影が、ねずみの最期に付き添ったというだけで、ここにねずみの弱虫精神を突然変異させるだけの何かがあるとすれば、それこそ、遠藤が聖書を読んでいて馴染めないという奇蹟物語と同じ話型となってしまうだろう。聖書が示す現実のイエスは、遠藤が言う通り、「手ばかり握って奇蹟は行えない」無力な男であったかもしれない。だが、「愛」に生きるという信念を決して曲げることがなかったとすれば、彼は無力ではあつても、ねずみのような弱虫ではない。だが、『死海のほとり』においては、ねずみとイエスの間にある「弱虫と無力の違い」という溝が埋められることないまま、ねずみの最期の場面で両

者が重なり合う。そのため、多少なりとも強引な結びつけ方と受け止められるのだろう⁽³⁹⁾

とはいえ、聖母マリアはもはや人間を超えた存在であるとすれば、ねずみの中にイエスが復活し、ねずみがイエスと同じ「人々の悲しみを洗う」使命を背負った存在となつたと描いたことは、『沈黙』で、踏み絵を踏む者の足の痛みを知る「同行者イエス」から一步踏み込んだ、「同伴者としてのイエス」像であるに違いなく、こうした強引さが残されてもなお、単に優しく許してくれるだけではないイエス像を打ち出すことを、遠藤が考えていたことを示している⁽³⁹⁾。「同伴者イエス」は、人々を、イエスの「愛」の世界へと連れていく。そこには、苦しみを「慰める」だけのイエス像からは想像し難い、無力なイエスが有する一見無様にしか見えないなかにある、凜とした強さがある。

『侍』における同伴者イエスの効用——おわりに代えて

これまで確認してきた通り、『沈黙』の「同行者イエス」は、人間的弱さから生じた苦しみを分かち合う存在として働き、特にキチジローに象徴されるような人間の苦しみを共有し、人間の弱さを許し慰めてくれる存在として、作者によって主張された。それが、『死海のほとり』における「同伴者イエス」に至ると、人間的弱さの面において遠藤がキチジローよりももっと「いかん」というねずみ⁽⁴⁰⁾の苦しみを共有するだけではなく、イエスの十字架の死によつて可能となつた「人々の悲しみを洗う」という使命がねずみにまで課され、そのねずみの死の意味

を探し、イスラエルを歩いた戸田の心情もまた、ねずみの死をそのように捉えることに共鳴し、物語は閉じられる⁽⁴¹⁾。では、遠藤が第二期を締めくくったと語る『侍』（新潮社 昭55年4月）において、同伴者イエスは、どのような生き方を、登場人物たちに促すのだろうか。

江戸初期、伊達政宗の命によりノベスパニヤとの通商を開くために渡欧した支倉常長をモデルとした主人公長谷倉は、過酷な船旅を堪え、先祖伝来の黒川の土地を返してもらうため、また、殿である白石さまからの使命を全うするため、「武士はならぬ」と言われた切支丹の教えにまで帰依し、その責務を果たそうとする。だが、ヨーロッパへの道中、日本のキリスト教徒に対する処遇が変わったために、この責務は無意味なものとなるばかりか、通商交渉成立のためとはいえ、切支丹となつたことを咎められ、果てには、処刑されることとなる。政治の世界に翻弄され、生きる意味を喪失した侍の心に、自分と似た存在として思い浮かぶのが、「あの男」——イエス——である。作者が「あえて没個性にした」⁽⁴²⁾という通り、侍は、自らの心情を烈しく吐露することのない人物として創られている。「出来ることなら黒川へ戻りたい」という叔父の願いや、「ノベスパニヤとの通商を」という白石さまの願いになるだけ添うように生き、ヨーロッパまでの長い船旅を過ごす。その侍が、初めて、誰のためでもなく自分のために言葉を発するのは、旅を言いつけられた政治的な意味を告げられた場面である。侍は、共に帰国した西と、自分達の役割が、殿である白石さまが大海原

を渡る航海技術を盗むための罠であつたことを知らされ、「どこで死のうと朽ち果てようと、一向にかまわぬ身分ひくい召出衆をやはり使者衆に選んだ」と聞き、「召出衆でも、人間ぞ」と傷ついた獣のような呻き声⁽⁴³⁾を發した。殿である白石さまからの命令は、侍一族が信頼を寄せる寄親の石田を通じて言い渡されていたため、侍は、せめて石田さまは自分を労つてくれるものと考えていたし、殿は、自分の苦勞の全てを御存知だと信じていた。だが、信じていたもの全てに裏切られる。そこで、心に浮かぶのが、「あの男」であつた。

侍は、家族への土産にと棄てずに持ち帰つたヨーロッパの品々を、評定所から切支丹関連物を所持していると嫌疑をかけられぬよう焼き捨てるが、その炎を見つめながら、「私には、もう人間が信じられなくなりました」という西の言葉と、「これからはな、目だたずひっそりと生きていくことだ」という石田さまの言葉を噛みしめ、改めて、長かつた旅を思い返す。その時、メヒコで出会つた日本人の元修道士が教えてくれた「その人」が、まるで自分のことのように、胸に浮かぶのである。

その人とは針金のように痩せ、力なく両手を上げて釘づけにされ、首垂れたあの男だつた。侍はまた眼をとり、あのノベスパニヤやエスパニヤの宿舎で、毎夜、壁の上から自分を見おろしていたあの男の姿を思いうかべた。今はなぜか昔ほど蔑みも隔たりも感じない。むしろあわれなこの男が囲炉裏のそばでつくねんと坐つた自分のそれに似ているような気さえする。／（略）侍はあの辮髪の男（注、メヒコ

で出会った日本人の元修道士がテカリの小屋のなかでこの紙に文字を書きつづけている姿を想像した。夜のテカリの沼はこの谷戸の夜と同じように闇ふかいだろう。辮髪の男がなぜこんなことを書かねばならなかったのかは、侍にも漠然とわかるような気がする。あの男は自分だけの「その人」がほしかったのだ。ノベスパニヤの教会で豊かな司祭たちが説く基督ではなくて、見棄てられた自分とインデイオたちのそばにいてくれる「その人」がほしかったのだ。「その人、我等のかたわらにまします。その人、我等が苦患の歎きに耳かたむけ、その人、我等と共に泪ぐまれ……」侍にはこの拙い文字を書きつづつたあの男の顔が見えるような気がする。⁴⁴⁾

今後はひっそりと暮らすことを進められるばかりか、方便とはいえ切支丹に帰依したことで謹慎を言い渡される侍は、「大きな海を二つ渡り、王に会うため、エスパニヤまで出かけた。それなのに王には会えず、あの男ばかり見させられた」と嘆く。そして、運命が、「我等のかたわらにまし（略）、我等が苦患の歎きに耳かたむけ、（略）我等と共に泪ぐまれ」る「あの男」と巡りあわせたのだと……⁴⁵⁾ そして遂に、殿である白石さまの江戸への申し開きのため、侍が処刑されることとなった時、下男との与蔵は、侍にこう告げる。

「ここからは……あの方がお供なされます」／突然、背後で与蔵の引きしぼるような声が聞こえた。／「ここからは……あの方が、お仕えなされます」／侍はたちどまり、ふ

りかえって大きくうなずいた。そして黒光りするつめたい廊下を、彼の旅の終りに向って進んでいった。⁴⁶⁾

『死海のほとり』において、処刑されゆくねずみにイエス（あの男）が付き従う場面は、その直後において、ねずみが石鹼となつてイエスと同じ、人々の悲しみを洗う役目を背負つたと、多少強引にみえるまでしてその意味づけを重ねられた。それに対し、『侍』における処刑されゆく侍の傍らにおられるであろう「あの方」の意味は、その死に際して「そばにいてくれ（略）苦患の歎きに耳かたむけ、（略）共に泪ぐ」んでくれる存在ではあつても、ねずみの場合のようにその使命を積極的に語られることはなく、引用部分にあるように、与蔵の言葉に侍が大きく頷く姿を写して、場面はもう一人の主人公ベラスコの死の場面へと切り換わる。また、長谷倉が渡欧する切っ掛けを作ったベラスコが、死を前にして思うのは、「自分の虚栄心と傲岸とが、（略）無数の人間を傷つけた」ことであり、ベラスコによつて浮き彫りにされるイエスの姿は西洋的価値観が孕む危険性である。とすれば、「人々の悲しみに寄り添う」ために「十字架に架けられたイエスの死との結びつきは、ねずみの場合の方が強力に打ち出されていると言える。と、同時に、前述した「同行者イエス」と「同伴者イエス」の違いを考慮すれば、侍にとつての「あの男（イエス）」は、政治の世界に翻弄され、信じる者に裏切られた彼の悲しみを知らずにはあつても、それ以上の能動的働きかけを、侍に促すものとして描かれているとは言い難い。とすれば、『侍』における「同伴者イエス」とは、『死海の

ほとり』が描いた「イエスの相似形になろうとするキリスト者」から、一歩後退していると言わざるを得ないだろう。

だがここで、侍とイエスの相似形を考えた時、図らずも政治犯として処刑された二人の人生の上にある問題を忘れてはなるまい。遠藤が、作家としての出発期から持ち続けたのは、政治の世界における価値基準とは異なる「真実（倫理・道徳意識）」の確立であった。また、まだ調査段階であるが、政治に愛を求めた発言（視点 ある記事から）（『毎日新聞夕刊』昭53年10月4日〜12月27日）など）を行つている。政治に愛を求めることとは、戦時下における米国人捕虜の生体解剖事件を扱った『海と毒薬』において、集団の利益が個人の利益に優先する危険を、遠藤が直視していたことにも通じる。これらの点については更に調査を深め、いずれ稿を改めて考察の機会を持ちたい。

【注記】

- 1 「異邦人の苦惱」（別冊新評）昭48年12月号）、引用は『遠藤周作全集13』新潮社 平12年5月 171頁に拠った。
- 2 遠藤周作×佐藤泰正『人生の同伴者』春秋社 平3年11月、引用は新潮文庫 平7年4月 196頁に拠った。
- 3 山根道公編「年譜」のなかで、イスラエル旅行の説明が初めて登場するのは昭和44年の項で、「新潮社の書下ろし長篇の準備のため、三田文学の若い後輩の泉秀樹、加藤宗哉らを連れてイスラエルに行き、一カ月間、新約聖書の背景を巡り、二月、帰国。」（『遠藤周作文学全集15』新潮社 平12年7月 356頁）とある。しかしながら、『死海のほとり』を書き上げ

た所感を述べたともいうべきエッセイ「異邦人の苦惱」（注1に同じ）に、『沈黙』（略）の翌年、（略）はじめてイスラエルへ旅行に出かけた。（略）このイスラエル旅行は、七年間の間（注、『沈黙』から『死海のほとり』を発表するまで）、毎年一度ずつ行われ、（略）七度のイスラエル旅行で聖書の背景になっている自然の風景、またイスラエルの風景というものを、多少、頭にたたきこんできた」（176〜177頁）とある。更には、『死海のほとり』の下敷きの一部となった「聖書物語」（後の『イエスの生涯』新潮社 昭48年10月）が「波」に発表されたのが昭和43年5月号〜昭和48年6月号であることを考慮し、小稿では、昭和42年を遠藤初のイスラエル旅行と位置づける。

- 4 「友情と恋愛」（「知性」昭31年11月号）、「純潔について」（『産経新聞』昭33年1月12日）、「恋すること愛すること」実業之日本社 昭32年10月、『恋愛論ノート』東都書房 昭33年8月など。
- 5 「聖書のなかの女性たち」（『婦人画報』昭33年4月号〜昭34年5月号）、引用は、『遠藤周作文庫 聖書のなかの女性たち』講談社文庫 昭50年11月 11〜12頁に拠った。
- 6 笠井秋生「海と毒薬」——日本人的な感覚の追究」（『遠藤周作』その文学世界』国研出版 平9年12月所収） 63頁
- 7 『人生の同伴者』注2に同じ、108頁
- 8 「日本人の道徳意識」（『図書新聞』昭33年1月18日）、引用は『お茶を飲みながら』集英社文庫 昭57年2月 199頁に拠った。
- 9 「聖書のなかの女性たち」注5に同じ、12頁
- 10 「日本人の道徳意識」注8に同じ、199頁
- 11 『新装版 恋すること愛すること』実業之日本社 昭62年7月 13〜

16 『私の愛した小説』新潮社 昭60年7月、初出は「宗教と文学の谷間で」(「新潮」昭58年10月号〜昭59年11月号)、なお「遠藤周作文学全集14」新潮社 平12年6月 37〜45頁参照

12 『イエスに邂逅した女たち』講談社 昭58年11月 なお、講談社文庫 平2年12月 29頁参照

13 遠藤が、十字架に架けられるまでのイエスと復活後のキリストという使い分けを始めるのは、『死海のほとり』(新潮社 昭48年6月)及び『聖書物語』(「波」昭43年5月号〜昭48年6月号、後に改題して『イエスの生涯』新潮社 昭48年10月となる)の執筆を意識し始めてからのことである。よって、ここでのキリストは、イエスと同義と捉えて差し支えない。

14 「聖書のなかの女性たち」注5に同じ、89〜90頁

15 遠藤が「慰め」と「共苦」とを区別したのは、憐憫という感情から派生する罪の問題を意識してのことであろう(「黄色い人」(「群像」昭30年11月号))。

16 「聖書のなかの女性たち」を端緒として、遠藤文学のイエス像の変遷を論じたものに笠井秋生による「遠藤周作におけるイエス像の変容」(「文芸研究」平16年3月号)「遠藤周作——同伴者イエスの発見」(「国文学解釈と鑑賞」平21年4月号)などがあるが、「慰め」と「共苦」の違いには注目されてはいない。それは、『イエスの生涯』に至ると、この違いがさほど明確に記述されなくなることに由来すると推測する。

17 『人生の同伴者』注2に同じ、192頁。但し、『沈黙』執筆直後に設定された「座談会 井上神父をかこんで」(「批評」昭41年8月号)において、

遠藤は、キリストを同伴者として認識し、生きていく上でのその必要性を語っている(128頁)。しかしながら、『死海のほとり』『侍』等で「同伴者イエス」像を打ち出して以降、改めて『沈黙』のイエス像を「同行者イエス」と言い改めていることに留意したい。

18 先行研究は、『沈黙』から『侍』までを同伴者イエス像掌握のための一連の深化として把握する論調にある(佐藤泰正「遠藤周作における同伴者イエス——「死海のほとり」を中心に」(「国文学解釈と鑑賞」昭50年6月号、佐藤泰正「書評 新たな発端への予感 遠藤周作『侍』」(「海」昭55年7月号)、笠井秋生「侍」をどう読むか——日本におけるキリスト教土着化の問題」(「キリスト教文学研究」平19年5月号))。

19 『沈黙』新潮社 昭41年3月、なお「遠藤周作文学全集2」新潮社 平11年6月 312頁参照

20 『沈黙』注20と同じ、311頁参照

21 「聖書のなかの女性たち」注5に同じ、85頁

22 『沈黙の声』(『沈黙の声』プレジデント社 平4年7月所収) 70〜72頁 この点に関しては、『沈黙』批判の決算書であった「母の宗教・父の宗教——マリア観音について」(「京都新聞」昭43年10月14日)で強く主張されて以降、『死海のほとり』執筆に関しその信仰解釈研究書となる『イエスの生涯』に至るまで同様である。

23 「異邦人の苦悩」注1に同じ、176頁

24 「日本の沼の中で」(「野性時代」昭54年1月〜6月号)、引用は『切支丹時代——殉教と棄教の歴史』小学館ライブラリー 平4年2月 209頁

25 遠藤周作×江藤淳「死海のほとり・付録」新潮社 昭48年6月 5頁

26 「母と私」(『母を語る』潮文社 昭42年10月所収)、なお、『遠藤周作文

- 学全集12『新潮社 平12年4月 393頁参照
- 29 「日本の沼の中で」注26に同じ、195〜197頁
- 30 井上洋治×三浦朱門×遠藤周作「座談会 井上神父をかこんで」注18に同じ、121、124〜125頁参照
- 31 遠藤作品における「母」の役割の変遷については、拙稿「遠藤文学における「母なる神」——かくれ切支丹調査から得た成果」（『九大日文』21号 平25年3月号）にて論じた。
- 32 母マリアが、イエスの生き方に追従したが故に聖母マリアとなったという遠藤の理解については、「聖書のなかの女性たち」注5に同じ、90〜94頁参照
- 33 『死海のほとり』新潮社 昭48年6月、引用は『遠藤周作文学全集3』新潮社 平11年7月 202頁に拠った。
- 34 『死海のほとり』注33に同じ、203頁
- 35 遠藤周作×高堂要×上総英郎ほか「座談会『死海のほとり』について」（『たね』昭49年7月号）91頁参照。またこの席上で遠藤は、ねずみが石鹸になったこと、イエスの十字架の死は質が違うのではないかと問われるが、「質がちがうからこれはアナロジーになる」（89頁）と答えている。また、直接的でわかりやすいアナロジーを描くことに批判的な論に、高尾利数「現実の矛盾の観念的救済」（『日本読書新聞』昭48年8月6日）がある。
- 36 「聖書のなかの女性たち」注5に同じ、93〜94頁
- 37 佐古純一郎×井上洋治×高堂要「死海のほとり」について」（『別冊新評』昭48年12月号）141頁
- 38 『死海のほとり』と表裏一体をなす『イエスの生涯』において遠藤は、

弱虫であった弟子たちが、イエスの死後、なぜ彼等がイエスの愛の生き方に追従するようになったのかを考察し、彼等の弱虫精神が変心するとすればなにか切つ掛けがあったはずだというのが、その点は、最後まで謎として残される。ただ、『イエスの生涯』において、その可能性を含む心情として認識されているのは、「申し訳なかつた」と思う気持ちだということだが、ねずみには、その気持ちすら描かれていない。

39 この部分のイエスの強さを打ち出す論に、高堂要「遠藤周作のイエス像——『死海のほとり』について」（『福音と世界』昭48年12月号）がある。

- 40 「座談会『死海のほとり』について」注35に同じ、90頁
- 41 『死海のほとり』注33に同じ、204頁
- 42 遠藤周作×加賀乙彦「自作案内『侍』について」（『文学界』昭55年8月号）204頁
- 43 『侍』新潮社 昭55年4月、引用は『遠藤周作文学全集3』注29に同じ、410頁
- 44 『侍』注43に同じ、415頁
- 45 『侍』注43に同じ、429頁
- 46 『侍』注43に同じ、432〜433頁
- 47 『侍』注43に同じ、434頁
- 48 「赤毛布の佛蘭西旅行」（『カトリック・ダイジェスト』昭26年11月号）昭27年7月号、なお、『ルーアンの丘』P H P研究所 平10年9月 89頁参照